

大田南畝における服部南郭 - 『仮名世説』の成立-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2019-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 徳田, 武 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19858

大田南畝における服部南郭

——『仮名世説』の成立——

徳田 武

大田南畝(二七四九―一八二三)が極初の文人として著名な服部南郭(一六八三―一七五九)と、その著作『大東世語』(寛延三年刊)を、どのように認識していたか、それが彼の人物説話集『仮名世説』(文政八年刊)執筆にどのような作用を及ぼしたか等の諸問題は、いまだ十分に考えられてはいないようである。本稿は、この問題に就いての私案である。

一 大田南畝と書山上人

大田南畝が江戸青山の百人町の妙有庵に隠棲する詩僧書山上人を始めて訪れたのは、明和二年(一七六五)、十七歳の時であった。¹⁾時に上人は四十四歳である。

上人は、極初の文人として著名な服部南郭に詩を学んだ人で、以後、南畝は上人が八十三歳で亡くなる寛政六年(一

七九四) 四月十七日まで、その交わりを持続する。ほぼ四十年の交際である。

南畝と著山上人との交際のありようは、早く玉林晴朗の『蜀山人の研究』(一九四四年六月発行) 第五章「宮瀬龍門と著山上人」に紹介されているのだが、ここには玉林があまり取り上げなかった南畝の「呈著山上人」(著山上人に呈す) という漢文^②を現代語訳することに拠って、具体的に窺ってみよう。

前日の会に就いては、誠に忘れることができません。上人の方丈の室は、諸子を容れることができ、公修(岡部四溟)・叔成(菊池衡岳)・君節(大久保流徳)・子諒(島田佐内、酒上熟寐^{さけのうまのじくぬ})。市ヶ谷佐内坂の名主)が、或いはじつと考え込んでから才を走らせ、或いは思ひを風雅な所に巡らせました。ある者は緩慢であり、ある者は軽俊であって、それぞれに資質を異にしております。(山田) 君忠(松斎) 松崎観海弟子。『蜀山文稿』(藤好本蔵を送る序)は、初見ではありますが、古くからの知り合いのようです。心ががさつな僕のような者でも、上人の結社に加えられるしております。

上人の長広舌は、一言でもって百万人の鋭鋒をも摧くことができるでしょう。深い教理を分析し、時おり諧謔を繰り広げます。だから、人々をして不満足的心を無くさせます。また自身でも、一坐の取り計らいは、自分を除いて誰がいようかと思いなさっているようです。

帰る時になって、僕曰く、

「先の路を戻るので、もう知っていて面白くない、月に乗じて道を変え、隠田(現、渋谷区神宮前)に遊ぶのに越した事はない、隠田の景勝には、観るべきものが有る」

と。皆この提案に従いました。ただ君節だけは聞き入れないで去りました。原駅村(現、渋谷区原宿か)を過ぎ、

酒家に入りました。主人がたいそう酔って、大いに客を喜ばせます。向かい合って笑談します。大いに飲み食いし、肉は山盛りで、酒は海を傾けるほどです。瓢々として風に乗る仙人の趣があります。

谷があつて、赤土といます。橋を渡ると隠田になります。一帯に霧が立ち込め、北風が藁を振わし、霜が天に満ちています。寒月が水に映り、水が巖石に当って音を立てます。月光が注いで、美しい珠玉となり、鉤と為り耳輪と為る。玉が分かれては合する如く、金が砕けては銷けるようです。様々に変化して、描写できません。田間の一丘に、熊野祠が有ります。山の小道を踏んで、雑草を開き、岩の湧き水を飲むと、松柏が蔽っており。鳥居をくぐり、社の門を叩きました。是の時に当って、熊野三山の神は、柯を飛ばし枝を垂れて、隠者を断わるのに忙しいばかりでありました。歌や笑い声が、人気の無い谷に響きあいます。山下に住んでいる一人の男が、手に白杖を持って、やって来ている、

「どこの氣違いが、真夜中に神社に闖入しているんだ」

と。子諒が手持ちの余り錢を与えると、

「はいはい」

と言つて去りました。謝康樂（靈運）が赴任先の臨海郡を捉われない行動で驚かしたのに似た態度です。

家に帰つて寝ようとしても、明るくて寝られません。屋根にまだ月が懸っているのです。

上人は、諸子を指導して下さる。ああ、出かければ小役人にべこべこし、家に居れば家族に代わる代わる責められる。鬱々として、一日も前日の遊びを思わないことはありません。狂人の酒態を、どうして長者にひけらかそうとしましょうか。上人は固より『列子』の海鷗の如き存在で、諸子はこれに狎れているからであります。どうかお許し下さい。

右の著山の庵での集まりの日は特定できないけれど、それを考えるための手掛かりは幾つか内包されている。一つは、山田君忠が著山と初見だ、と言っていることである。これは、山田が南畝とも知り合って間もないので、著山に紹介されたのが最近である、という事を語るのであろうから、まず山田と南畝の出会いの日を押さえる必要がある。「南畝年譜」を按ずるに、山田松斎の名が初めて見えるのは、明和九年（一七七二、南畝二十四歳）の七月頃である（『明和九年壬辰詩稿』一〇九番）。この頃に初めて会ったらしい、と考えられる。とすれば、その後間もなくして著山に山田を引き合わせるということになるだろう。

二に、大久保流徳と島田佐内の字も見えるが、流徳も明和九年の春に南畝の詩に登場している（『明和九年壬辰詩稿』三十五番）。佐内は、やや遅れて、安永三年（一七七四、南畝二十六歳）二月四日の牛込専光寺の宝合会の会主として出てくるのが初見である。実際には、その前から知り合っていた可能性が強い。岡部四溟と菊池衡岳が牛門四友のメンバーとして早く明和二年頃から南畝と親しかったことは、言うまでも無い事だろう。

右の登場人物五人の内、南畝をも含めて岡部四溟・菊池衡岳・大久保流徳の四人は、安永元年（明和九年と重なる）の冬に著山とともに唐衣橘洲の三余楼で会飲している（『冬日、著公・公修・叔成・君節・周夫と同じく温之の三余楼に飲す。敏字を得たり』『明和九年壬辰詩稿』一四二番）。当然、著山の庵室でこの四人が揃った事も、この頃にはまだあった事であろう。

更に、右文の末には南畝が結婚していた事も暗示されているが、彼の結婚は、明和八年、二十三歳の事である。

以上の諸条件を考え併せると、明和・安永の交には南畝ら六人が著山の庵室を揃って訪れる可能性が強いので、右文の成立も明和・安永の交としておこう。

なお、安永九年（一七八〇、三十二歳）も、南畝と岡部四溟・菊池衡岳・大久保流徳の四人が一堂に会する機会が多

いので、その頃の事とも考えられるが、山田松斎の初見の事を考慮すると、やはりそんなに遅くなる事はあるまい。^③
 右の五人の内、岡部四溟と菊池衡岳に就いては言わない。大久保流徳に就いては、『一話一言』補遺参考篇三、「大久保流徳翁墓」に見える漢文を読み下すと

大久保流徳翁、名は正貞、字は君節、文化十二年乙亥八月二十日、目白坂大仙寺に葬る。幼名は牛太郎、中比は総髪、後に剃髪、詩を好み、本草家の学を善くす。内山伝三（淳時）先生の門人なり。

とある。蔵書家であるようで、南畝は、寛政七年に『邏嗎人疑状』『邏嗎人款状』『松前御応対行列之覚』を借りて写している（『叢書細目』沿海異聞）。

島田左内に就いては、南畝の随筆『奴風』に、

市谷左内坂の名主島田左内、酒をたしみて面白き男なりき。狂名を酒ノ上熟寐といふ。安永二年宝合といふ戯をなして狂文を書しことありき。牛込原町恵光寺に談義のありし時、此書院をかりて宝合をなせし時、長持に宝物といふ札をはりて、恵光寺にはこびしかば、皆人まことの宝物と思ひて、うやくしく拜せしに、あられぬ物どもなれば、あやしみてかへりしものもありき。此宝合の記一卷、市谷左内坂富田や新兵衛（曾尚堂といふ、狂名、文屋安雄）。板行にして世に伝ふ。今は此本すくなし

と言う。彼は、天明四年五月に歿した。^④

右文によって、南歌と着山の交際のありようや着山の人となりが伺えるのである。上人は、弁舌が達者で、深い教理を諧謔を交えて説くことができ、座持ちが巧みである。それ故に、衆人が集まるのである。また、『列子』の故事に説かれる鷗の如くに人々をして狎れしめる。それ故に、南歌は、深夜に酔って神社を騒がせるといふ自分たちの狂態をも上人に打ち明けることができる。それは、南歌にとっては、窮屈で拘束の多い小役人の勤務と煩わしい家庭とからの解放、という意味を持っている。上人がこうした意味を理解してくれると思えばこそ、南歌は俗人が嚮嚮しかねない狂態を長々と叙述するのである。

二 着山の庵室

このように着山は道学臭が無く、自由闊達な文人であったから、南歌が得意とする狂歌にも参入することがあった。南歌の狂歌集『をみなへし』（『狂歌若葉集』下にも所収）には、南歌の

あめ、原憲が柩をうるほして、いたくもり侍りければ

さす板に雨のふる屋のむねもりはかさはりの子のしるし也けり

という狂歌に対して、着山が、

返し

着山法師

かさはりの子ならばよしやむねもりもさしていとはじ雨のふる屋を

と返したものが収められている。平宗盛が笠張の法師の子であったという伝説（『源平盛衰記』四十三「宗盛取替子」）を踏まえた作である。南畝の作には「降る」と「古」、「棟漏り」と「宗盛」の掛詞が、青山のそれには「差して」と「然して」の掛詞が用いられている。青山は他にも『萬載狂歌集』十四に、

青山にかくれし口すきみに 懶翁

百が味曾二百が薪二朱が米、一分自慢の年のくれ哉

という狂歌がある（『仮名世説』排調にも見られる）ほどで、俗文芸に携わるのをも厭わない柔軟さがあった。

上人には、かかる柔軟性があるので、当初私は、南畝が明和初年の江戸の人気者である飴売り土平や笠森お仙・お藤を題材として著わした漢文体の戯文小説『売飴土平伝』（明和六年刊）の末尾に付された狂詩「土平・阿仙が伝を読んで戯れに歌を作り、舳羅山人に贈る」の作者「友人 陸道人」も、上人であろうかと考えた。その印には「青山」とあるからである。しかし、南畝の師匠格であり、二十七歳も年上である上人が「友人」と自称するのも、そぐわない事だと感ぜられるので、これは同じく青山に住んだ親友岡部四溟のことであろうと考え直すに至った。

が、とにかく上人を柔軟で闊達な人と観る考えは変わらないので、その一証として、上人は南畝らがその庵室で飲酒することを許容した、という事を挙げたい。その事を示す南畝の詩を一首挙げておこう。一は、明和九年夏、『明和九年壬辰詩稿』八十二番のものである。夏に上人の庵室に集まった折、菊池衡岳が酒と料理を携えて来たことに感謝し

た詩である。

夏日集者公山房、謝閑叔成携酒饌、得寒字（夏日、耆公の山房に集ふ。閑叔成が酒饌を携ふるを謝す。寒字を得たり）

禅房避暑此相看 禅房に 暑を避けて 此に相看る

長夏青山白日寒 長夏 青山 白日寒し

雲作奇峰臨澗水 雲は奇峰と作りて 澗水に臨み

風吹空翠落林巒 風は空翠を吹いて 林巒に落つ

行厨自有杯中物 行厨 自ら有り 杯中の物

盛饌兼開竹裏盤 盛饌 兼ねて開く 竹裏の盤

為是遠公能許禁 是れ遠公の能く禁を許すが為に

併將幽興尽君飲 併せて幽興を將て 君が飲を尽す

耆山殿の禅室に暑さを避けて、顔を合わせる。

夏の長い一日、青山に囲まれて、日は涼しく感じられる。

雲は面白い峰の形をなして、谷の水に映り、

風は、みずみずしい山気を吹いて、林の間に見える丘に到る。

手提げの弁当入れには酒の器も用意されて、

竹林の内に杯盤を広げ、盛んな御馳走を開ける。

慧遠公ともいうべき蒼山殿は、禁制を緩めて酒を許して下さるので、

風流な興趣も生じて、貴殿は飲を尽くしなされる。

南畝は、次の詩にも見るように、上人を虎溪の三笑の故事で名高い慧遠になぞらえる事が多い。尾聯は、その事を踏まえて、上人が飲酒戒を破って庵室で酒宴を開くことを許容する寛容さを述べたものである。

次には安永二年（一七七三、南畝二十五歳）五月頃の作（『南畝集』二、一八一番）を挙げよう。梅雨時、岡部四溟・菊池衡岳・唐衣橘州・井伯秀と上人の庵室に集まった際の作である。

梅雨与岡公修関叔成滕温之井伯秀集著公山房分韻（梅雨。岡公修・関叔成・滕温之・井伯秀と蒼公の山房に集ふ。韻を分つ）

一室 蕭然負郭辺 一室 蕭然たり 負郭の辺

開軒遥望縉雲天 軒を開いて 遙かに望む 縉雲の天

黄梅欲熟千山雨 黄梅 熟さんと欲す 千山の雨

白鷺纒飛十畝田 白鷺 纒かに飛ぶ 十畝の田

為是遠公忘禁戒 是れ遠公の禁戒を忘るるが為に

任他陶令醉留連 任まもあしほあ他れ 陶令の酔うて 留連するを

向來如憶清涼境 向來 清涼の境を憶ふが如きも

更破禪林結夏眠 更に破る 禪林 結夏の眠りを

街はずれの庵室はひっそりとしており、

窓を開けると遙か彼方の空に赤い夕焼け雲が見える。

梅は多くの山に降る雨によって熟し黄色くなり、

白鷺は今や十畝広がる田に飛んでいる。

慧遠公が禁制を忘れて下さるお蔭で、

陶淵明のように我々は居続けして酒を飲んでおられます。

我々は以前から清浄な境地を望んでいるように見えますが、

また更に上人が夏安居げあんごに入り、坐禅三昧になる生活を破ってしまいました。

頸聯がやはり上人の飲酒への寛容と南畝たちのそれ故のくつろぎを述べたものであり、第六句の陶令が、これまた虎溪の三笑の故事に登場する愛酒家の陶淵明を踏まえて南畝たちを表わしていることは、纏述するまでもあるまい。

三 耆山と服部南郭

右のような自由で伸び伸びした交際の際に、耆山から聞いた事は色々あったろうが、中でも南畝が好んで聞いたことは、耆山の師である南郭に関する逸事であった。それらには玉林晴朗も引いているものもあるが、南畝が南郭をどのよ

うに観ていたのかを知ることを目的とする本稿では、それら以外のものをも含めて、あらためて列举し、解説を加えておこう。その際、なるたけ先行研究書に記されていない事に触れるよう努める。

まず、南郭の『大東世語』の影響を受けている『仮名世説』（文政八年、一八二五刊、没後二年）から、その例を挙げよう。

青山にいませし着山和尚は、南郭先生の門人なり。青山百人町の吏の地をかりてすむ事三十年、妙有庵といふ。萬翠一窩といへる扁額をかゝぐ。屏風に張り置きたる、先生の書翰あり。

今日妻子ども召連、開帳案内に罷出候処、御留守を不顧、大勢押込、どろ坊同前の仕合、御免可被下候。

とあり。本集四編に、

古道青山静 空居白日寒 柴門信客啓 笏室容天寛 茶水清充飲 菊英芳可餐 陶家秋色少 此就遠公看

の作あり。（雅量）

右の屏風に貼られた南郭の書簡は、南郭が家族を引き連れて、某寺の開帳に出掛け、その序でに上人の庵室を訪れたが、上人は留守であった、しかし南郭は上人とは遠慮の無い仲であるので、構わずに上がり、庵室の茶道具などを借用して茶を飲んだりしたことを謝ったもの、と解せる。南郭と上人の気の置けない仲が推察される書簡である。雅量は、度量の広い様をいうが、この場合は、上人の泥棒などは心配しない様と同時に南郭の拘らない様をも言うのであろう。

また、本集四編の詩とは、『南郭先生文集』第四編（宝暦八年、小林新兵衛刊）一の「秋日、訪着山上人青山禅居」を言うのであり、上人の『青山樵唱集』を指しているのではない。『南郭集』では第六句の「芳」が「香」に作られて

いるのだが、その訳を掲げておこう。詩の内容から推して、右の書簡に言う日に作られた可能性がある。

古道青山静 古道 青山静かに

空居白日寒 空居 白日寒し

柴門信客啓 柴門 客の啓くに信せ

笏室容天寛 笏室 天の寛きを容る

茶水清充飲 茶水 清くして飲に充つ

菊英香可餐 菊英 香 餐すべし

陶家秋色少 陶家 秋色少く

此就遠公看 此に遠公に就きて看る

青山の辺りの古くからある道は静寂で、

主が留守の庵は昼間から日が冷たい。

質素な門は来客が開けるのにまかせ、

方丈の部屋には広大な天ほどの度量の方が住んでおる。

水は清らかでお茶に用いることができ、

菊の花は芳しくて食べられる。

陶淵明（南郭を言う）の家には秋の風情が乏しいのだが、

ここ慧遠殿（上人を指す）の庵で見ることが出来る。

南畝が前引の詩で自らを陶淵明に、上人を慧遠になぞらえるのは、この南郭詩に倣ったものであろう。

著山和尚の物語に、赤羽先生、門下の諸生のあつまりてかたるをきけば、狂詩をつくるといふ。何の題ぞと問へば夜発を詠ずといふに、先生微笑して、二十四文明月夜と朗吟して過られしとぞ。（排調）

「夜発」^{やはつ}とは、最下級の売女である夜鷹^{よたか}のことであるが、その売値が二十四文であった事を踏まえて、あの風雅を誇る南郭先生が俗なる狂詩を物した。その雅と俗の落差が滑稽なのであり、排調とは、こうした滑稽味を言う。勿論、狂詩の名だたる作者である南畝は、南郭先生のこうした排調を喜んでいるのである。

次に、『仮名世説』以外の書で、著山伝来の南郭逸事を挙げてみよう。『改元紀行』は、享和元年（一八〇一、南畝五十三歳）に南畝が浪華まで旅した折の紀行文であるが、二月二十九日に小田原の早雲寺に到り、北条五代の墓を見る件りにいう。

北条五代の墓はいづこと僧にとひ、書院の庭より入りて見るに、苦むしたれど文字あざやかにみゆ。後にいとなみたてしものなるべし。斉の七十余城にもおとざりし勢を思ふに、涙もとどまらず。台殿松杉入空翠と南郭が詩つくりしもむべなりけらし。

南郭の詩というのは、『南郭先生文集』三篇一の長編七古「早雲寺覽古」の第一句をいう。該詩は、やはり北条氏五代の事蹟を懐古した作だが、南畝が南郭詩をよく読んでいることが窺える例である。これは耆山伝来の話柄ではないのだが、その直後に次の記載があるので、引いておいたのである。

同書の翌三月一日、薩埵峠から富士山を眺める件りに言う。

南郭翁が芙蓉館の壁に、この処より富士をみるかたをゑがきて、東海道の景色これに過たるはあらじとつねにいへるよし、耆山上人のことのはまで思ひ出つつ、輿よりおりてかちよりゆく。

南郭が赤羽橋の居宅である芙蓉館の書斎の壁にみずから山水図を描き、その内で悠遊したことは、彼の古詩である「齋中四壁に自ら山水を画き、戯れに臥遊歌を作る」(『南郭集』四編一)に表わされている。また彼には、薩埵峠からの展望を描写した五律「薩埵眺望」もある(『南郭集』四編一)。延享二年(一七四五、六十三歳)、上方に旅行した時の作であろう(日野龍夫『服部南郭伝攷』)。右は、それらと相補う記事で、確かなものであろう。そして南畝がそこに南郭の風流を見出して、共感していることは、もはや言うまでもなからう。

南畝の膨大な随筆『一話一言』の内、巻六は、天明六年頃(三十八歳頃)に記されたものであるが、それに、

南郭先生、毎年十二月十三日には家内の煤払をさけて、東海寺少林院にて詩会をなす。名づけて掃塵会といへりと、耆山和尚の物語なり。

という。文字通り世塵を避けて、詩に没頭する南郭の態度を風流な話柄として蒼山は伝え、南畝もこれを承けたのである。この話柄は、文化六年一月三十日（六十一歳）、玉川巡視の旅で川崎辺りの小机村の泉谷寺を訪れ、恵頓上人の『泉谷瓦礫集』を借りて、その内の「忍海上人伝」を読み、次のように記した記事（『向岡閑話』）にも再び見られる。

正月二十八日、小机村に宿す。翌日、松亀山泉谷寺にいたりて、住持僧にあひ、泉谷瓦礫集三巻をかり得て帰れり。是恵頓上人の文章にして、撰津淨福弟子恵海校とあり。恵頓上人、天明三年癸卯の自叙あり。其文の中より抄出するもの左のごとし。

東都故事、臘月十三日、城市貴賤、巷是皆掃除家屋迎新曆、鷄鳴至日午、遠近掃擊之声、雷響車轟。此日儒宗南郭服翁携諸門生、避風塵於師蓮社、師乃延知立・曇海・蒼山等諸尊者、相与談名理、終日罄歎、後常以為例、名曰掃塵會。及師移宝松、愈益盛矣、時人号曰廬山陶謝集。（東都の故事、臘月十三日、城市貴賤、巷に是れ皆 家屋を掃除して新曆を迎う、鷄鳴より日午に至るまで、遠近の掃擊の声、雷の響き車の轟くごとし。此の日 儒宗南郭服翁 諸門生を携え、風塵を師の蓮社に避く。師乃ち知立・曇海・蒼山等の諸尊者を延き、相与に名理を談じ、終日歎を罄くす。後常に以て例と為し、名けて掃塵會と曰う。師の宝松（筆者注、三縁山宝松寺）に移るに及び、愈よ益す盛んなり矣。時人号して廬山陶謝集と曰う）

右は、掃塵会についてより詳細な情報を伝えているものだが、この恵頓上人と南郭についても、南畝は同じ時の記録である『調布日記』「小机村の泉谷寺を訪問す」に、

惠頓和尚、此寺に住職する事十五年、隠居して十一年、此地におれり。文をよくして詩をよくせず。南郭翁も尚は詩の才なければ、文のみ作り給へといへり。服(部)仲英、(大内)熊耳、(宇佐美)瀧水の二先生など、しばしく来り宿せり。性酒を嗜みて豁達なり。故に蒼山和尚とことに交あつかりしと云。

惠頓和尚の遺文をみん事をこひしに、泉谷互礫集三巻を出してかしぬ。

と、更に詳しい情報を知らせてくれる。

『一話一言』に戻って、巻二十五の次の記事は、文化四年(一八〇七)八月一日、南畝が五十九歳の時に記されたものであるが、実際は遥かに早い時に聞いた話であろう。

南郭ははじめ不忍の池の端にすみしが、つるに赤羽中の橋の北、御披官何某の地をかりて住めり。初、増上寺門前三島町にて講釈せし時は、市中の住居にて二階にて講釈せしが、屋の棟ひきくして人々の頭をうたん事を恐れ、古詩十九首を一紙にかきて梁にはり置し比より講席につらなりしと、青山の蒼山和尚の物語也。

南郭が増上寺の門前で講義を始めたのは、享保十六年(一七三二)冬、四十九歳の事である。その頃から間もない時期に、増上寺にいた蒼山は入門した、と考えられる。南郭がまだ富裕ではない時期で、天井が低い家屋で講義していた際の対処は、『仮名世説』の雅量や排調の部にも入れても良いような雅趣に富んだ話柄である。

四 その他の南郭記事

南郭の履歴に関しては、『一話一言』の補遺参考篇（自筆本巻五十）にも記事がある。それは幕府医師である望月三英の『三英随筆』（『鹿門随筆』とも）からの抜き書きであり、蒼山からの聞き書きではない。しかし、南郭伝の重要な一節である柳沢家致仕の問題に触れている箇所であるので、引いておこう。

松平美濃守殿（筆者注、柳沢吉保）御出頭全盛之時に、京都より柏木藤之丞、服部幸八とて兩人歌学者を呼下し被召出候。服部は母方古之連歌師長嘯之末孫之由にて、兩人共に納戸役勤居申候由。其内に（荻生）惣右衛門の勧めによりて儒字の心懸有て儒者に成立たり。後に隠居して保山と被申候。其節に数寄（不運な事件）在之、無理いとまを乞、浪人と成、小右衛門と改名せり。不首尾故、屋敷入出はせぬ也。池端に居たり。依て芙蓉館と齋号をせり。其後に芝へ移居して僧徒其外を教授せり。後に切通し辺に移、又赤羽橋辺へ移りて此所に死去せり。

『伝攷』六十六頁でも断るようには、「隠居して保山と」称したのは、柳沢吉保の事蹟の誤りである。

同じく『一話一言』二十五の次の記事も、蒼山が伝えたものではなく、文化四年九月十二日の南畝の体験を述べたものである。

江戸高名輪字喜寿の森に神戸の老侯本多随翁君います。年は八十三にして健に見えさせ給ふ。猗蘭侯の御子にして

南郭、蘭亭などの講釈をもきかせ給ひし事などかたらせ給ふ。庭に宇喜寿山あり、池を心字池といふ。そのかみ南郭先生元喬のうたに、

しづかなる池の心を水鳥のうきすの浪のたつとしもなし

此翁のうたあまたありしかど、みな生前にやきすててのこせる事なしといふ。庭のさまは猗蘭侯の物好し給ふまま也とぞ。軒に枝さしかはせる赤松の大きなるあり、紅葉も多し。ことし卯丁長月十一日にまかりけるに、老侯手づから五言古詩一葉をたまふ。詩は人日登台の詩なり。宇喜寿山に古松一もとありしが今は枯たり。臨海楼といへる高どのも今はなしといふ。九月十二日記大江戸のふるきうたとて人のつたへしは、

葛西の舟はをなもこぐ、うきすの森を目あてに

といふなりけり、その心をからうたにいにはば、

聞説葛西舟 聞説く 葛西の舟

女兒能盪槳 女兒も 能く盪槳す

遙看喜寿林 遙かに看る 喜寿の林

鬱々遠相映 鬱々として 遠く相映す

ともいはまほしけれ。されどこの台にはむかし赤羽の翁（筆者注、南郭）もまうのぼりしときけば、かの潮来の一曲にもはぢざらめやは。

酔ぬればしはしはなしも高名輪にこころうきすのもりのことは 杏花園

右は席上にて書し文也。又詩一首、

秋日遊神戸老侯喜寿園 秋日、神戸老侯の喜寿園に遊ぶ

臨岸青楓未染霜

岸に臨む青楓 未だ霜に染まらず

池為心字望蒼蒼

池は心字を為して 望めば蒼蒼たり

偶窺喜寿名園色

偶ま喜寿の名園の色を窺えば

解道猗蘭奕葉光

解道す 猗蘭 奕葉の光を

(岸に臨んでいる青楓は、まだ霜に染まっではいなく、

池は心の字形をしていて、眺めやると青々としている。

たまたま宇喜寿の名園の景色を眺めると、

先代の猗蘭侯以来の文化が輝いているのが好く分かる。)

右の南郭の和歌に就いての記載は、『文会雜記』三上にも二行ほどの分量で存するが、こちらの方が遥かに詳しい。

伊勢神戸藩主であった本多随翁(忠永)の父の本多猗蘭(忠統)は、荻生徂徠や南郭と親交を持ち、その目を奪うような大部な『猗蘭台集』(享保十七年刊)には、兩人との交渉を示す詩文が多い。南畝は、その庭の宇喜寿の森に関する、江戸に伝わる俗謡を五絶の竹枝体に漢訳したが、それは自身「潮来の一曲」と記すように、潮来節を五絶の竹枝体に漢訳した南郭の「潮来詞」二十首(『南郭先生文集』三篇一)の方法に倣ったものである。また南郭の歌には、「宇喜寿」と「浮葉」の掛詞が用いられているが、南畝も「高名輪」と「浮き」という、狂歌の本領である掛詞を多用した作を物したのは、南郭の和歌を意識したものであろう。もって南畝における南郭の影響が知られる例である。

本多猗蘭といえば、南畝の随筆『杏園間筆』にも関連する記事が見える。

壬戌(享和二年、一八〇二、五十四歳)十一月二十日、神戸侯本多伊予守(忠齋)^{ただひら}席上にて見る所の書画等あらま
し左に記す。侯は猗蘭侯藤忠統の孫なり。

徂徠、東壁、南郭、春台、岡伯錫、仲錫、山井鼎等、送西台侯詩一卷(太宰純拝草とあり。是 斥非を著さざる前
の詩なるべし。拝草といふ事を斥非には難ぜり。南郭書、初年にて、拙くみゆ)

南郭詩及書牘二十八葉。

右は、五年前に遡ってのものであるが、猗蘭の孫の忠齋の席上で、徂徠・南郭・安藤東野・太宰春台・岡井兄弟・山
井崑崙らの護園派文人が河内西代^{せいたい}の領主であった猗蘭を送った際の詩巻を見せられて、感想を述べたものである。春台
の『斥非』は、延享元年(一七四四)の刊行で、南郭は六十二歳と老年になっており、初年とは言えない。それよりも、
享保六年、南郭三十九歳の四月、大番頭の役にある本多猗蘭が京二条城在番となり、上洛した際に、護園一門が送別の
詩会を催して、徂徠・南郭・春台らに送別の詩がある(『伝攷』一七四頁)ことを傍証とすべきであろう。さすれば、
南郭の書体も南畝がよく見ていた老年のものよりは若く見えたことであろう。

次いで『一話一言』二十八に収まる次の記事は、やはり着山が伝えたものではなく、南畝の実見を記したものである
が、挙げておこう。文化五年正月五日に記されたものだが、南畝が初めて渋谷羽沢の南郭の別荘である白貴墅^{はくひしよ}に遊んだ
のは、後述するように安永五年(一七七六)頃の九月十日、二十五歳の事であったから、それからほぼ三十年後の記載
になる。

南郭服先生(元喬、子遷)白貴墅の別荘は渋谷羽沢といふ所にあり。門に題門の七律の額をかく。(この額、誰人

か蔵せしやらん、今見えず）庭に大きな高野槇の樹あり。堂に竹簡篆書の額あり。翫風七月の脱簡にして諏方侯の賜なりとぞ。床の壁に猿と古木を描き障子に鶴を画く。忍海上人の画なり。袋棚の二枚の障子に蟒緞のきれをはり、金地の扇を二枚おして、夜鶴怨曉猿驚の字、先生の自筆なりき。近き頃ゆきてみしに、忍海の猿鶴の画をば一諸侯のために豪奪せられて、拙き筆して猿鶴を補ひ画がけるは、見るめもいぶせかりき。

白賁墅の有様と約三十年後の推移とをこれほど詳しく明らかにしている記載は、南郭の娘婿である服部仲英の「白賁亭記」（明和六年刊『踏海集』六）を除くと、他にはあまり有るまい。やはり南郭の風雅と数寄を伝えているもので、南畝が南郭のどのような処を敬愛していたかが伺える記事である。

なお、白賁墅に関しては、『一話一言』五十四（文政三年五月頃執筆、七十二歳）にも、

南郭の白賁墅、橘千蔭の芳宜園の名、めづらしき事に覚へしが、白賁園・芳宜園共に鷺峰文集にありて、第二義なり。鷺峰集はよみし人まれなるべし。

という記事がある。林鷺峰の文集に見えるというのだが、大部な『鷺峰文集』の巻三から十三までの「賦」「記」の部分にあると見当を付けて、ざっと流覧したのだが、まだ白賁園・芳宜園の名を見出せていない。

南畝の狂歌狂詩集である『万紫千紅』（文化十五年刊）の「東豊山十五景」の詞書にいう。

東豊山新長谷寺、目白不動尊のたたせ給へる山は、宝永の比、再昌院法印のすめる関口の疏儀莊よりちかければ、

西南にかたぶく日影に杖をたてて、時しらぬ富士の白雪をながめ、千町の田面のみどりになびく風に涼みて、しばらくいきをのぶとぞきこえし。又、物部の翁の牛込にいませし比にやありけん。南郭、春台、蘭亭をはじめとして、このほとりの十五景をわかちて、からうたに物せし一卷をもみたりし事あれば、わが生れたる牛込の里ちかきあたりのけしきもなつかしく、ここにその題をうつして夷歌によみつけぬるも、そのかみ大黒屋ときこえし高どのにて、ははの六十の賀の筵をひらきし事ありしも、又天明のむかしなれば、せき口の紙の漉かへし、目白の滝のいとりのくりことになんありける。

徂徠や南郭、太宰春台・高野蘭亭ら護園の文人が目白の関口辺りの十五景を詠じた詩巻に刺激されて、南畝も同題の狂歌を詠ず、ということ、次に十五首が羅列されるのであるが、これは割愛する。私は、護園の文人の十五景詠の巻物というものは、実見したことが無い。ただ、『視聽草』九集之十に、大学頭林信充(のぶみつ)（榴岡）の「東豊山新長谷寺十二景詩並序」（享保十八年五月）と大学頭林信言(のぶのぶ)（鳳谷）たちの同題の詩巻（宝暦四年）が収められており、南畝はこれらを見て、護園派文人の物と誤認した可能性もある。そこで、「東豊山十五景」詩を軽々に南郭らの影響と速断することは避けておこう。

南郭の狂歌や和学に関連する記述も存する。随筆『南畝秀言』(かうげん)（文化十四年刊）上、八十四には、

藤本由己の春駒狂歌集巻二に南郭服子遷の序あり。

として、その漢文を挙げる。藤本由己は、若年の南郭が歌学をもって仕えていた柳沢藩の医者である。植谷元氏に

『春駒狂歌集』とその著者」(中村幸彦博士還暦記念論文集『近世文学作家と作品』。後に『江戸の文人画人』所収)があるが、この難解な漢文を現代語訳したものは、まだ無いようであるから、ここに拙訳を試みる

人の世で、口を開いて大いに笑うことが古えより得難いのは、どうしてか。快い気持ちを得難いからである。とは言うものの、堂に満ち溢れるほどの者が、眉を揚げ齒を表わして、笑いこらげて、口をつぐむことができず、そして大勢の聲がやかましく、耳元でがやがやとして、何を言っているのか分からないほどの事は、今でも多くある。これらは、どうして快いものではなからうか。けれども、文人や才子は笑わない。風雲水石、花虫魚鳥、自分がそれらに就いてどのように対しているかを知らないからだ。そしてまた、風雅な詩句を集めて、題を設け韻を置いて、吟じたり詠じたりして、すぐれた趣向が満ち溢れ、目の前に光り輝いて、自分でもたまらないほどのものは、世にどうして無からうか。これはまた、どうして快いものでないだらうか。それなのに、凡庸な人や青二才は笑わない。どうしてただ凡庸な人や青二才が笑わないだけであらうか。風雲水石、花虫魚鳥、私はこれらに対してどのように処すべきかが分からない。

友人の藤本君由己は、放言して自身で快しとする人で、当初から快を他人に求めてはいない。そして、ひとたび頭をもたげて舌を転ずると、鮮やかに文章をなし、長々と歌を作る。雅なるようだが古くはなく、俗っぽいようだが野卑ではない。文人や才子に論なく、凡庸な人や青二才に論なく、人々をして大いに笑い、おのずと笑わせる。のみならず、花はその為えがに鬨なげを動かし、鳥はこの為えがに足を躍らし、風は舞い雲は飛び、水は湧き石は鳴り、魚は躍り虫は爪先立つ。ことごとくが笑う姿態を備えているものようだ。これはいったいどういう方法を備えているからであらうか。思うに藤本君の抱懐は雅を絶対とはせず、俗を絶対ともしない。そういう分けて、その快さは、雅

においても得られ、俗においても得られる。いわゆる雅と俗がその抱懐に分かれて存在しているのではない。ただ、いわゆる雅と俗がその抱懐に分かれて存在しているのではないから、天下の大風流、大快活のもので、藤本君を越えられるものがあるのか。という分けて、ただに人々をして大いに笑わせるばかりでなく、造物者をも絶倒させることができる。千年の後、古えの荘子のような者が出現して、ひとたび藤本君に逢えば、口を開いて大いに笑う者は朝夕にこれに逢う、と必ずやすることであろう。

正徳三年晩夏

南郭散人

南郭のこの論は、単に雅俗論で狂歌を論じたと言って済ませるようなものではない。滑稽が生じる理由を根源的に論じたものと言うべきである。つまり、宇宙の森羅万象の現象の中から滑稽を鋭敏で柔軟な眼によって能動的に掴み取らなければ滑稽は得られない、さらにそのようにして掴み取った滑稽を優れた詞章に盛らなければ優れた狂歌は得られない、と言おうとしたものだ、と考える。なお、「口を開いて大いに笑う」が『荘子』盗跖の有名な快樂論を踏まえていることは、言うまでもなからう。

南郭が漢学に通じていながらも歌学をよく理解していることが、こうした先進的な狂歌論を生み出しているのであり、さればこそ藤本由己もそうなる事を期待して南郭に序を請うたものであろう。南畝がそこまで考えていたかは、これだけの資料では断言できないが、とにかく固い漢学者(雅)が滑稽な狂歌(俗)を鋭く論じていることに狂歌の作者である彼は我が意を得て、『南畝莠言』に採り上げたものと考えられる。その点、これまた南郭への敬愛を示した例として良いであろう。

次に同じく『南畝莠言』の下、十の、次の記事は、南郭の和文である「檜垣寺古瓦の記」について述べる。記載の年

次は不明である。

南郭翁服部元喬、檜垣寺古瓦の記のかな文一篇、翁手づから書きて肥後の曇竜上人におくられしを、金地院よりしばしば翁に書給はん事をこはれしかば、うけひかれしが、いく程なくて身まかり給ひぬ。その草稿の家にありしを其子仲英名元雄翁の志をつぎて金地院におくれり。さるを青山妙有庵にいませし耆山上人のかり得て写し置給ひしを、翁のかな文めづらしければ、ここにしるす。

とあって、次にその仮名文が載せられるのであるが、割愛する。南郭は、前引の『三英随筆』に見たように、当初、和学から出発して漢学に転じた人（5）なので、立派な和文をも作ることができる。それ故、平安時代の伝説的な家人檜垣の姫の事を、宝暦八年、一七五八、七十六歳の折に和文で著わしたのであり、それはまた清水浜臣の『泊泊筆話』（さざなみひつわ）（文化十年稿）にも収まるのであるが、著山・南畝ともに漢学者南郭にそうした変わった逸事があることを後世に伝えようとしているのである。

この檜垣寺古瓦の記については、南畝が編んだ叢書の目録である『叢書細目』（みそのや）三十幅篇』にも、次のような記事がある。

檜垣寺古瓦記 服部南郭 文化四年（一八〇七）

これは南郭先生、手づから書て肥後の曇竜上人におくられしを、金地院の上人しばしば先生に書きたびてんと乞れしかば、うけひかれしが、いく程なくて身まかり給ひぬ。その草稿の家にありしを、先生の義子仲英その志をつぎ

て、金地院の上人に贈られしを、青山の耆山和尚のかり得て、双鉤して写置給ひしを見しは、安永三年甲午の比なり。今は仲英翁も耆山和尚もともになき人なれば、金地院の上人もはや世におはさじと思ふに、此書もまたいかがならん。ここに物部・太宰の翁の和文をうつせしちなみに、麓塵のうちより抄出してここに附す。文化四年丁卯四月小尽 五十九翁杏花園

即ち、右記を南畝が耆山から借りて籠写したのは、安永三年頃の事であったのである。

以上、煩を厭わず南畝の南郭言及の例を挙げた。なお数例が挙げられるのだが、私にとって意味を持つ例は殆ど挙げたと考えるから、もうこれ以上に煩を繰り返すまい。これらの例を通観するに、耆山から聞いた場合も多いが、それ以外の所から情報を得ている場合も少なく無い。にしても、南郭の弟子である耆山と交わっている間に南郭情報を聞く機会が多かったことは確かなことで、そうした間に南畝の南郭への憧憬や敬愛の情がいや増していったことが容易に想像できるのである。換言するならば、それは、極初の文人として、できるだけ俗塵を排し、風雅な生活形態と詩文を構築していった南郭への憧憬や敬愛の情であった。幕吏としての拘束と繁忙な生活とに追われていた南畝にとって、町儒者として独立した生活を保て、詩文の力によって大名との交際も得られ、しかも比較的に精神上の自由を確保できた南郭は、羨望と敬愛の対象であった。そうした南郭への関心が、以上のように多種多様な南郭情報を書き留める際の原動力となっていた、と言って良い。単なる筆まめ以上のものが、そこには見出せるのである。

五 南畝の漢詩に観る南郭

右のような南郭への関心と敬慕が何時頃から南畝には生じたのか、その具体的な様相はどのようなものであったかを更に確認すべく、今度は南畝の詩に即して検討してみよう。

『南畝集』一、「全集」に付された詩の番号では二五一番の詩は、安永二年冬、南畝が二十五歳の作であるが、南郭に言及した詩の中で最も早いものである。

過赤羽橋懷南郭先生 赤羽橋を過ぎて南郭先生を懷う

赤羽橋辺木葉稀 赤羽橋辺 木葉稀なり

依然流水繞臨圻 依然たる流水 繞りて圻に臨む

遺音唯有伝天籟 遺音 唯だ天籟を伝ふる有り

南郭先生去不帰 南郭先生 去つて帰らず

赤羽橋の辺りは落ち葉して、木の葉も少ない。

昔と変わらずに洪谷川（古川）が流れて岸边をめぐっている。

南郭先生が遺された音声は、ただ川音だけが伝えているが、

先生御自身は、もはや亡くなられて帰らないのだ。

南郭が暮らした赤羽橋辺を通過しての感慨を詠じた作である。南郭の死んだ宝暦九年（一七五九）から十四年後のものだ。この若い時点で、南畝は早くも南郭に対する憧憬と敬愛の情を示していることが知られるのである。

『杏園詩集』（文政二年刊）一に収まる「九月十日、同公修叔成尋白賁園」は、安永丙申（五年）九月三日に作られた「詠松寿家君六十一初度」の二首後に配置されているから、安永五年頃（二十八歳）の作と考えられるが、その九月十日に岡部四溟・関叔成（菊池衡岳）とともに白賁墅を訪れている。最初の訪問であろうか。

九月十日、公修・叔成と同じく白賁園を尋ぬ

青山辞負郭 青山 負郭を辞し

白賁訪荒園 白賁 荒園を訪う

帳裏聴鳴鶴 帳裏に 鳴鶴を聴き

林頭古画猿 林頭に 画猿古りたり

塔空苔自上 塔空しくして 苔自から上り

節去菊猶存 節去りて 菊猶お存す

憶昔披榛路 憶う昔 榛路を披き

追随客満門 追随 客 門に満つるを

青山から御府内を出て、

白賁墅の荒れた庭園を訪れた。

とばりの内で鶴が鳴いているのを聞き、

床の間には猿の絵が古くなっている。

階段は上る人もいないので苔が蒸し、

重陽の節が過ぎたのに菊がなおも咲いている。

昔を思うに、茨の道を切り開いて、

南郭先生に面会する客が門に満ちていたことだろう。

「墅は東都の城西の渋谷村に在り。旧と南郭先生の嘗む所なり。壁上に忍海上人の猿鶴を画ける有り」との自注がある。現在の荒廢と対比して過去の南郭生存時の盛況を想像している所に、南郭の死亡を惜しむ南畝の情がにじみ出ている。

次の「春日、同徐徳卿・井子瓊・鈴一貫遊西郊」（春日、徐徳卿・井子瓊・鈴一貫と同じく西郊に遊ぶ。『南畝集』八、一五八七番）は、五首の内、第二首。寛政二年（一七九〇）春、四十二歳、鈴木徳卿・井上子瓊・鈴木猶人と渋谷方面に遊び、またもや白賁墅を訪れた際の作である。

赤羽先生白賁園 赤羽先生の 白賁園

茅茨欵側鎖柴門 茅茨 欵側して 柴門を鎖す

牀頭画古余棲鶴 牀頭 画古くして 棲鶴を余し
 帳裏人空叫曉猿 帳裏 人空しくして 曉猿叫ぶ

西嶽芙蓉廻望出 西嶽の芙蓉 望を廻りて出で

東隣松樹至今存 東隣の松樹 今に至りて存す

傷情不但山陽笛 傷情 但に山陽の笛のみならず

伐木丁丁処処村 伐木 丁丁たり 処処の村

右白賁園

赤羽先生の白賁園は、

質素な門が雑草に蔽われ傾いたまま閉ざされている。

床の間に描かれた絵は古び、鶴が飛び立とうとしており、

とぼりの内には旧主人は居らず、曉に猿が叫んでいるばかり。

西には富士山が取り巻いておるのが眺められ、

東隣に在ったとされる松の樹は今も存在している。

先生を憶う情は、晋の向秀しやうしやうが山陽の旧廬を経て笛の音で亡き友を偲んだ事にも増さり、

あちこちの村から木を伐る音がちようちようとして聞こえて来る。

自注に「南郭服子遷の墅、渋谷羽沢に在り、壁上に猿鶴を画く。先生の詩に云う、東隣幸いに借る青松の色、西岳何れより来たる白雪の光と」とある。前引した『一話一言』二十八の白賁墅の光景と併せ読まれない。引用された南郭詩

は、七律「白賁墅四首」(『南郭集』四編二)の第一首の頷聯である。これまた、南畝が『南郭集』を読み込んでいる証である。第七句の「山陽笛」は、『晋書』四十九、向秀伝の故事に基づく。

『南畝集』十七の「人日、壁上掛南郭先生人日登墓詩、和其韻(人日、壁上に南郭先生の人日登墓詩を掛け、其韻に和す)は、文化七年、一月七日、六十二歳の作である。

草閣方人日	草閣	方に人日
甕牖試窺臨	甕牖	試みに窺い臨む
遠山滯宿雨	遠山	宿雨滯り
残雪溜芳林	残雪	芳林に溜まる
晏眠偶中起	晏眠	偶ま中ごろに起き
坐至微陽沈	坐ろ	に微陽沈むに至る
煙雲澹含色	煙雲	澹く色を含み
聚散如有心	聚散	心有るが如し
已与俗流遠	已	に俗流と遠く
無復騷客尋	復た騷客	の尋ぬるもの無し
兒孫紛嬉戲	兒孫	紛として嬉戲し
撫弄当兼金	撫弄	当に金を兼ねべし
辛盤具柏酒	辛盤	に 柏酒を具え

小酌微解襟 小酌 微や襟を解く

繁絃悦里耳 繁絃 里耳を悦ばす

誰知太古音 誰か太古の音を知らん

草堂で人目を迎え、

粗末な家の窓から外を覗いてみる。

遠くの山には前夜からの雨が残り、

芳しい梅林には雪が溜まっている。

寝坊して遅くなってから起き、

無為の内に弱い日差しが沈んで行く。

遠くの雲は淡い赤色を帯び、

集まったり散ったりするのには、人の心があるようだ。

もはや俗人とは隔たったが、

詩人も訪れては来ない。

子や孫たちは頻りに遊び戯れ、

彼らと遊んでいるのは、千金にもまさる。

正月のお膳に柏酒を備え、

一杯やって、ほろ酔いとなる。

巷では三味線の音が喧しいが、
誰が古代の雅楽の音などを理解できようか。

『南郭集』三編一の五古「人日登臺」の韻に次した詩である。南畝の南郭詩愛好が老年に到るまで持続されていたこととの証と見られる。南郭詩は、次の如くである。

城南有高臺	城南に高臺有り
乗春且登臨	春に乗じて 且く登臨す
春風吹万物	春風 万物を吹き
光沢動園林	光沢 園林を動かす
況逢人日嘉	況んや人日の嘉なるに逢うおや
繁華自可尋	繁華 自ら尋ぬべし
宮觀何鬱鬱	宮觀 何ぞ鬱鬱たる
闌闌麗城陰	闌闌 <small>かんかん</small> 城陰 <small>かげ</small> に麗く
車馬多貴客	車馬 貴客多く
歛娛悵賞心	歛娛 賞心に愜 <small>かな</small> う
剪綵競相贈	剪綵 競いて相贈り
奇巧直万金	奇巧 万金 <small>まんだ</small> に直る

顧此應和氣 此の和氣に應ずるを顧みて

蕩滌開懷襟 蕩滌 懷襟を開く

寄言幽谷鳥 言を寄す 幽谷の鳥

亦応改好音 亦た応に 好音に改むべし

江戸の南に高臺があり、

新春が来たのに乗じて登り眺めてみる。

春風がすべての物を吹き、

陽光は園の林を活気づかせる。

まして素晴らしい人日に逢って、

市街の繁栄した様を尋ねたくなる。

寺院が何と満ち満ちていることか。

大きな門が城の裏に設けられている。

乗り物や馬には貴人が多く乗り、

行楽気分を楽しませている。

人形を競って贈りあい、

その巧みさは千金にも相当する。

このどかな氣候に應じて、

気持ちをさっぱりさせて、くつろぐ。

谷から出て来た鳥に言いたい、

どうか好い音色に改めて欲しい。

双方の詩は、韻を同じくするものの、詩風は大分異なっている。南郭詩は、高所から俯瞰しているだけに光景が大きく、江戸の繁華を賛美する気に満ちている。これに対して、南畝の作は、自室の窓からの眺望であるだけに、当初は外を眺めていた視線が自己の周囲に戻って行き、小市民的な生活を写實的に描く。のように詩性は相違するが、正月に南郭詩を書齋に掛ける所に南郭への敬愛が持続していることを見出したのである。

以上の四首が明かに南郭に言及した詩であり、たびたび繰り返すが、これらを通して南郭の風流、とりわけ白賁墅における生活の芸術化を敬慕していることが窺えるのである。

六 南畝と『大東世語』

南畝の『仮名世説』は、文字通り『世説新語』の仮名版ともいうべき邦人の逸話集であるが、それが服部南郭の『大東世語』(寛延三、一七五〇年刊)を意識した著作であることは、容易に推察せられるであろう。『大東世語』は、南郭が南朝末の劉義卿編の『世説新語』の体裁に倣って編纂した、漢文体の我が国の説話集であり、本邦の世説物の先蹤作であるからである。山崎美成の「仮名世説序」にも、

書の説有るや尚し^{ひさ}矣。義慶氏、則を説林・説苑^{ぜいげん}に取りて、世説の書を作せり焉。是より而降^{のち}、則を斯に取る者、多からずと為さず。彼に在りては何氏語林、我に在りては大東世語、其の統と謂うべきのみ。

と、『大東世語』の書名が出ていることも、その事を物語っている。

前述したように、『仮名世説』に四話と少なからず南郭に関する話が収められていることも、南畝の『大東世語』意識の証左となるであろう。

南畝が漢文体の艶本である『大東閨語補』（天明四年、三十六歳、十二月序。改題本に『去垢集』がある）を著わしたことは、公認されているが、その書名が『大東世語』のもじりであることは、言うまでもない。戯文ではあるが、これまた、南畝の『大東世語』意識の証左とすることができよう。

南畝にとって、以上のように服部南郭と『大東世語』とは、敬愛され意識されている対象であった。とすれば、それが『仮名世説』創作の主要な動機になっているであろうことも、当然のこととして考えられるのである。

注

- (1) 『大田南畝全集』第二十卷「年譜」（久保田啓一・宮崎修多作製）。
- (2) 『全集』第六卷「蜀山文稿」所収。日野龍夫の訓読を付す。
- (3) 『南畝集』763番詩に「春日、岡公修・関叔成・山士訓・大久君節及び井生・甥義方と同じく蒼山上人の房に集ふ。居字を得たり」

768番詩に、「井伯秀の宅に花を賞す。岡公修・関叔成・大久君節・山士訓・山采美・森子厚と同じく賦して、冥字を得たり」

852番詩に、「秋日、公修・叔成・士訓・君節・美卿・寒仲と同じく藪氏の別業に遊ぶ、斉韻を得たり」

等が存し、これらの友人と集まっていたことが分かる。

(4) 「市谷里長島子諒を哭す」の自注〔杏園詩集〕続編。

(5) 『文会雜記』一上にも、「南郭ハモト歌人ナリ。歌ト画ノ芸ヲ以テ、故甲斐侯吉保ニ仕ヘラレタリ。ソレヨリ詩ヲ学ビ文ヲカキテ、彼翁（筆者注、荻生徂徠）ニ從ヒタマヘリ。ソレユヘ和書ハヨクヨミタル人也」という。

(6) 『大東世語』が徂徠学の流行に伴って生まれたものであること、南郭の魏晋と我が平安朝との風流への憧憬に基づいていること、所収説話には南郭の美意識が反映されていること等に就いては、未熟な若書きではあるが、拙稿「『大東世語』論——服部南郭に於ける世説新語」（その1は『東洋文学研究』第十七号、一九六九年三月、早稲田大学東洋文学会。その2・3は『中国古典研究』第十六・十七号、一九六九年六月、一九七〇年十二月）がある。近年には、堀誠氏たちの訳注（『大東世語』「豪爽」篇 注釈稿）『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第二十二号、二〇一二年三月）等も出現している。

（とくだ・たけし 法学部名誉教授）